年金と妹

みねひこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

年金と妹

【Nコード】

N9136F

【作者名】

みねひこ

【あらすじ】

幼くして両親を失った恵美は、いとこで幼馴染の要の家に引き取られた。いつまでも子供らしい甘えを取り戻せない彼女を、要は兄のように気遣う。彼女のため、これまで関わりがないと思っていた年金について調べることに。

第1節

1

また負けたか。
要は玄関を開けたとたんに薫った、食欲をそそる匂いに思い知った。
「恵美、今日は僕がやるからって、メールしといただろう？」
リビングに入ると、台所に向かう後ろ姿の恵美に、そう声をかけた。もう中学の制服から着替えもすまし、よく部屋着にしているズボンとトレーナーという、楽な格好だ。それに、カジュアルなエプロンをかけている。
「そう？　ごめん、気がつかなかった」
ニンジンをきざんで、豚肉をだしにつけて、手が離せない恵美は、振り向かずに返答をした。
見え透いたうそだ。澄ました顔で、舌を出しているのではないか、と疑ってしまう。恵美が要からのメールを気づかずに放置することなど、滅多にあることではない。
もちろん、要は恵美の作る料理が気に入らないわけではない。特に、今日はコンロに中華鍋が準備されているので、保証つきだ。要の腹をいつもはちきれんばかりの目にあわせるのは、恵美の作る八宝菜とシュウマイに、肉団子の甘酢あんかけか酢豚を組み合わせた強力な連合軍か、母が４回に１回ぐらいの割合で成功する、奇跡のカレーぐらいのものだった。
「かな君こそ、早かったね。部活はどうしたの？」
要が所属する高校の少林寺拳法部が、厳格な体育会系体質でないのは、恵美も承知の上だ。
「ちゃんと言ってきたから大丈夫だ。家で、腹をすかせた妹が待っ

てるって」
「ひどい！　人をくいしんぼうみたいに。あたしこそ、お腹をすかせたおにいちゃんの面倒をみてるんじゃない」
　今度こそ恵美は手を休めて、ぱっちりした瞳で要を見据えて、しっかりと反論した。
　要は笑って流し、小物を置いている棚の上に、ポストから取ってきた郵便物を放って、自分も着替えに二階の部屋に上がっていった。
「妹」、「お兄ちゃん」とふざけて呼び合うやり取りに、気分がほぐれている。
　荷物を片付けて、着替えをすませて居間に戻ると、もう料理は出来上がりにかかっていた。
「あ、よかった。お皿出して」
　要は、出来上がったばかりで湯気を上げる品揃えを見て取って、八宝菜用の大皿と、酢豚用の中皿、茶碗にコップに箸とレンゲを、二人分手早くそろえた。恵美がそれらに料理をよそっている間に、自分用のたくあんの入ったタッパーを、気持ちこっそり出しておいた。
「はい、できた。おばさんもやっぱり遅くなるみたいだから、食べちゃおっか」
「そうだね」
　要は待つつもりは端からなく、言うが早いか、恵美が向かいに座るよりも早く、さっさと手を合わせて食べ始めた。
「いただきます」
　恵美も箸を取る。こそっと上目で、要の気持ちのよい食べっぷりを見て、内心満悦だった。ただ、彼が何げない振りで、タッパーからたくあんを取り出してポリポリ言わせ始めると、眉をひそめた。
　その様子を要は、挑戦的に見返した。恵美がたくあん嫌いなのは承知の上だ。あちらも、朝にはわが家で唯一、納豆を食べる習慣を持っているのだから、たくあんごときで気兼ねをするつもりはない。
　結局、要は食べ過ぎた。恵美に、両親の分も残しておくように注

意されなければ、実際危ないところだった。
「ふふん、おいしかった？」
にんまりと、得意げな恵美に、「ああ、おいしかった」と、要は喜んで降参した。
「じゃ、あたしもごちそうさま」
各自で食器を台所のシンクに片付ける。食器洗浄機にセットするのは後回しにして、要がお茶の準備にとりかかる。
「玄米茶でよかった？」
とりあえずお湯を沸かしながら、要が聞くと、「うん、お願い」と、恵美が応じた。
母が帰ってきたのは、要が急須からそれぞれの湯飲みに、ゆっくりとお茶を注いでいる最中だった。
「ただいまー。いい匂いね」
母は帰ってくるなり、ジャケットだけ脱いで、疲れた様子で椅子に沈み込んだ。
「いつもありがとうね、恵美ちゃん。あら、要も早かったのね」
「いえ」と、恵美がお人よしに応じながら、配膳の支度にかかった。
要は不満顔もあらわに、「恵美に頼り過ぎだろ。今度、母さんが遅くなる時は僕が夕飯作るから、僕にだけメールくれればいいって言ったよね」
今日は仕事が遅くなるから、夕飯はあなたたちでよろしく、というメールが母から届いた直後、恵美には自分の当番を主張しておいたのだが、無駄だった。要もそれが分かっていたから、学校帰りの買い物を控えておいたし、恵美もそれを承知の上で、メールの返信をしなかったのだ。
つまり、その時点で要が目指せる最善の貢献は、恵美よりも先か、せめてすぐ後に帰ってくることで、恵美の買ってきた材料を取り上げることに限られた。だがいかんせん、要が通う高校と恵美の中学とでは、距離と終業時間にハンデがあり過ぎた。
母は要の文句を一笑に付した。

「ハハハ、ああ、おかしい。あんたに任せて、こんな立派なお夕食が期待できる？」
そう言って、いましがた恵美が並べてくれた一人前の夕食を、母はまるで自分の手柄のように見せつけた。そう言われては、要に反論の余地はあまりなかった。
「ごめんな、恵美。後片付けぐらいは母さんにやらせなよ。風呂、入れてくる」
「ん、ありがとう」
恵美はにっこりと、熱い玄米茶を受け取った。
「そういや、なんか母さんに届いてたよ。年金のなんかみたい」
要はさっき棚の上に置いた場所を、指し示して教えた。
「そう。何かしら。請求書？」
「知らないよ」
要は二人を残し、居間を出た。
風呂を洗ってお湯を張り始め、さあテレビでも、とゆっくり居間に戻ってくると、扉越しに母の興奮したような声が聞こえた。
「ちょっと、なによこれ！」
「どうかした？」
「見てよ」
要が部屋に入るなり、食事も途中の母が、開いたシールはがきを見せた。
今日、届いていたはがきだった。宛て名面には［年金の大切なお知らせです］と青字で書かれており、中身は圧着されたシールをはがして見るようになっていた。
「恵美、片付けなくていいから。風呂が入ったら、先に入って」
母からそのはがきを受け取りながら、要は恵美に勧めた。
「うん、分かった。じゃあ、おばさん、いいですか？」
「ええ、もちろんよ」
飲みかけのお茶が入った湯飲みを両手で持って、恵美は部屋に戻って行った。

要は程よくぬるまった自分の玄米茶の香りを楽しみながら、母に届いたはがきを読んだ。
それは社会保険庁から届いており、はがされたシールの三つ折りを開くと、真中には［年金加入期間の確認について（ご案内）］とあった。その下の本文では、［年金を受けるために必要な加入期間を確認できません］という一文が、太字と下線で強調されている。
右側に目を移すと、［あなたの年金加入期間］として、厚生年金保険加入期間や、国民年金加入期間に数字が入っていた。合計で、母の加入期間は、２６９カ月ということらしい。
次に裏面を見ると、［年金を受けるために必要な加入期間］という説明があった。それによると、どうやら３００カ月ないと駄目のようだった。
つまり…「なに、母さん、年金をちゃんと払ってなかったの？」
年金をもらえないという通知がきた、ということは、そういうことなのだろう。
「払ってるわよ、失礼ね。お父さんの扶養になってるもの」
「そっか…」
はがきの裏面をよく読むと、［『あなたの年金加入期間』に記載されていない年金加入期間］に関する説明もある。２６９カ月以外の期間も実はあって、年金をもらえるということなのかもしれない。
さっと一読しただけでは、よく分からないが。
「ふうん、ちゃんとしてるんなら、もらえないっていうこともないんじゃない？」
「そうよね、やんなっちゃう。これも、社会保険庁のミスかしら？」
「んー。ちょっと、この説明を読んでみないと…。借りてってもいい？」
「いいわよ。ついでに、社会保険庁に文句も言ってきてよ」
「ええ、そんなのは自分で言いなよ」
「私は仕事で忙しいの。年金がもらえなかったら、あんたたちの生活費にも困っちゃうじゃないの。しっかりやんなさい」

そう言われてはしょうがない。実際には父も小さいながら会社の役員として働いているので、パートで働いているだけの母の収入がなくなるからといって、家計が逼迫することはないだろう。とはいえ、養われているのは事実なので、お金の問題を盾に取られると弱い。

「わかったよ。文句を言う必要があるかは分からないけど、聞いてきてみる。だけど、社会保険庁って、何時までやってるの？ 学校終わってからで間に合うのかなあ。第一、どこにある？」

「知らないわよ、そんなの。自分で調べなさい」

要は遅まきながら、これ以上問答する無駄に気付いた。はがきを持って、退散することにした。

部屋を出る前、要は気持ち声を落として、「だけど、さっきみたいなお金の話、恵美の前ではしないでよ」

と、釘を刺した。

「何言ってんの。あんたは気を遣い過ぎなの。そんなんじゃ、余計萎縮しちゃうじゃないの」

「そうかな…」恵美の気性を思い、「そうなのかもね。気をつけるよ」

逆にたしなめられ、要は至極素直に反省した。

恵美の両親は既にいない。父は早くに妻子を置いて蒸発し、母は４年前、元夫が残した借金を背負った無理がたたったのか、若くして病死した。要の父は恵美の母の長兄で、遺された恵美をわが家に引き取ったのだ。

それ以前から、近所とまではいかないが同じ市内に住んでいたので、要と恵美は幼い頃からよく一緒に遊んだ。おむつ姿で泣いていた赤ん坊が、いつの間にやら女の子らしくなるまでの変化に、要ははっと意識する間もなかった。

気付いたら、恵美は学年の二つ違う要の周りでも名が聞こえてくるほどの、可憐と噂される少女に成長していた。それでも、恵美は要に対しては、いつまでもふざけたり強情を張ったりして、手の掛

かる妹のようなものだった。
ところが、母の死は、目も当てられないほど恵美を打ちのめした。引き取られてきてから長い間、彼女の心からの笑顔はなりを潜めていた。やっと遠慮がちな笑顔が覗き始めたのは、半年も経った頃だったか。中学に入ってからは環境が変わったのも功を奏したのだろう、クラスの友達とは普通に馴染んでいるようだ。
だが、家の中での恵美は、幼い頃に遊びに来ていた時とは様子が違い、いつまでも借りて来た猫のようだった。特に、自分が負担になっているのではないか、という意識には敏感だった。
トントン、と要の部屋の戸がノックされた。
「かな君、お風呂空いたよ」
ネットで社会保険庁のＨＰを調べていた要は、その声で作業を中断した。戸を開けると、パジャマ姿で髪を洗いざらした恵美が立っていた。風呂上り特有の香りが鼻をくすぐる。
「今週の土曜日、空いてない？」
要が聞くと、恵美は驚いたように、一拍置いた。
「なんで？」と、なぜか恵美は用心深そうだった。
「母さんの年金を聞きに、社会保険事務所に行こうと思って。ついでに街に寄ってくから、暇だったら一緒にぶらぶらとどうかな」
「行く」
恵美の返答は、要が少し面食らうほどきっぱりとしていた。
「そ、そう。じゃあ、土曜にね」
「うん」
恵美はにっこりと笑顔を見せて、部屋に戻って行った。
家に閉じこもりがちな恵美を、連れ出す機会ができて良かった。
要の表情にも、先程の恵美の笑顔が移って、しばらく離れなかった。

第2節

2

約束の土曜日、恵美が選んだ服装は春らしい水色で、軽やかだった。スカートは少し短すぎるかもしれない。ひらひらと揺れる動きに、通り過ぎる男たちの視線が釣られているという思いは、要の過剰な保護意識のためばかりではないだろう。また、彼らを責められる自信も、要にはなかった。

一方の要の服装は、冬に着倒した組み合わせから、ただオーバーを取っただけだった。厚めの綿生地の上着は、今日のような陽気には野暮ったいかもしれない、といつになく気になった。

「どこに行こっか？」

目をきらきらさせて、恵美は聞くのだった。街で遊ぶと行っても、要はいつも一人で漫画喫茶に入り浸ったり、好き勝手買い物をこなしていくのが常で、二人で楽しむ、というコースが、いざとなると思いつかなかった。

「んー、ペットショップでも、覗いてく？」

行こう、などとはとても言えない雰囲気だった。

とはいえ、社会保険庁の出先機関である社会保険事務所にまっすぐ

「行きたーい！」

苦し紛れの思いつきだったが、まんざらでもなかったようだ。恵美は機嫌良さそうに、要に身体を擦り寄せるみたいにして歩いていた。

「すみません、ちょっとお時間よろしいかしら」

ふいに声をかけられて、二人は振り向いた。きちんとしたスーツで身なりを整えた女性が、愛想よく二人に話しかけてきた。

「ごめんないさい、突然。実は私、こういうプロダクションの者なんだけど、お嬢さん、モデルの仕事には興味ありません？　それとも、もうどこかの事務所に入られてるのかしら？」
当の本人が要の後ろに隠れてしまったので、要が応答することにした。初めての経験ではない。
「まだ学生なので、今すぐそういう世界に、とは考えてません。よければ、名刺だけでもいただけませんか？」
女性が本人に目をやると、恵美も首肯した。
「そうですか。では、こちらをどうぞ。うちにはお嬢さんぐらいの子も大勢所属していますので、興味が湧かれましたら、ぜひ、ご連絡をください。お待ちしております」
要が名詞を受け取ると、女性は最後まで礼儀正しく、立ち去った。
「あれで良かった？」と、要。
「うん、ありがとう」
要は今の名刺を、恵美に渡した。
「念を押すようだけど、もし連絡をする気になっても、まず僕に相談してね」
「分かってる。そうするから」
恵美がこれまでこのようにしてもらった名刺は、捨ててさえいなければ、もう5枚ぐらいにはなっているはずだ。見るからにたちの悪そうなのは、そもそも受け取っていない。ネットで調べて見ると、結構な大手の名刺もあった。
恵美の内気な性格からすると、黙って行動して得体の知れない業界に飛び込むなどありそうにないが、アルバイトをしたいという意志ははっきり聞いているので、やはり心配なのだった。
「あたし、モデルなんかつとまるのかな？」
しばらくして、恵美が聞いてきた。
やはり、心引かれていない訳ではない。その気持ちの次第によっては、要としても応援するのにやぶさかではない。確かに恵美の飛

び抜けた美貌とスマートな姿形は、世に出さないともったいないない、という気にさせる。
ただし、自分が世話になっている家計の足しにしたいから、という動機であれば、要は断固として反対するつもりだし、今のところ、その理由が動機の主を占めているように思えた。
「人を見るプロがあちらから声をかけてくるんだから、向いてるのかもしれないね。僕から見ても、素材は十分だし」
要は問いには正直に答えた。恵美は、彼をじっと見つめた。
「それって、あたしがきれいってこと…なの？」
恵美の視線を慎重に避けつつ、要は顔が赤くなるのを自覚しながらも、表情は平静を保ち、その場は笑ってごまかした。困ったことに、恵美の視線は、なかなか外れなかった。
その後、予定通りにペットショップに寄った。ケージ越しに子猫や子犬をじゃれつかせたり、コロコロした毛玉のようなポメラニアンにはたまらず、店員に頼んで抱いたりもした。恵美も、要もだ。
その後には本屋に寄り、各々興味のある本棚を眺めて回った。そこを出る頃には昼時を回っていたので、うどん屋で空腹を適度に満たした。
「さ、そろそろ、本来の目的地に向かおうか」
「本来の目的地？　どこだっけ。映画館？」
恵美はリラックスして、おどけて見せた。要は幼い頃を思い出し、恵美の頭をなでた。
「違う、それはまた今度ね。今日は社会保険事務所に行くの」
「お役所かあ、こんなお休みの日に」
恵美は大仰にため息をついた。それでも、要が歩きだすと、遅れないように付いて来るのだった。
ＧＰＳ携帯のナビに頼って、歩くこと２０分程。たどり着いた社会保険事務所は、赤いレンガ色の建物だった。
自動ドアを通ると、すぐに［案内係］と名札をつけた男性職員が、

声をかけて来た。
「こんにちは。どういったご用件でした？」
案内係がいるとは思っていなかった要は、一瞬戸惑った。
「え、ええと、母の年金相談で」
「そうですか。お母さんからの委任状と、ご自身の身分証明書などはお持ちですか？」
「はい」
事前に、社会保険庁のホームページからダウンロードして、母に記入・押印してもらった委任状と、要の学生証だった。
「ありがとうございます。では、こちらの番号札をお持ちいただき、お待ちください」案内係は、機械から数字の書かれた紙片を引き抜いて要に渡し、電光掲示板に表示されている番号を確認した。「今だと、だいたい１０分から２０分程、お待ちいただくことになりますが」
「分かりました」
「お待ちの間、こちらの相談受付票にご記入ください」
要は手渡された用紙を持って、待ち合い場所に落ち着いた。５０人分までは行かないかもしれないが、かなり多くの椅子が設けられているスペースに、パラパラと今は１０人足らずしか座っていなかった。
恵美は座らせたまま、要は立って、記入用の台で相談受付票に記入していた。本人である母の基礎年金番号を始めとして、代理人である要と双方の名前や連絡先、用件などだ。母の年金手帳は持って来ていたので、基礎年金番号の記入も問題なかった。
「ヒャクニジュウロクバンノ番号札ヲオ持チノオ客様、サン番ノ、窓口マデ、オ越シクダサイ」
機械音声で、要の番号が読み上げられた時、１０分も経っていなかったはずで、受付票の記入はまだ済んでいなかった。ともあれ、興味のないテレビ番組を見ている恵美に声をかけた。
「あれ、早かったね。もう順番？」と、恵美は眠そうな声だった。

「そうだね。どうする、ここで待ってる？」
　窓口まで付き合わせることもないと思って要が尋ねると、恵美は勢いよく席を立ち、目をこすって決意を込めてぱちぱちとまつげを揺らした。
「分かった。途中で眠くなっても知らないよ」と、要は苦笑した。
　待ち合い場所から出ると、さっきの案内係が、「あちらです」と示してくれた。相談のためのブースは完全個室ではないが、ぐるりと円形のついたてでそれぞれ囲われていた。４つのブースが横並びになっており、それが2列ある。
　要は恵美をすぐ後ろに連れて、３番のブースをのぞいた。
「こんにちは！　どうぞ」
　デスクを挟んで向こうに座っていた女性が、元気良く声をかけて来た。４０代ぐらいの福々しい感じで、友達の家に行くと笑顔で迎えてくれるお母さん、というような印象だった。
「こんにちは。お願いします」
　そう言って要は書きかけの受付票と依頼状、それに学生証を差し出した。
「ありがとうございます。私、加藤と申します。よろしくお願いします」
「あ、こちらこそ」
　要がぎこちなく挨拶を交わす様子を、恵美はおかしそうに見ていた。
　女性職員は学生証を一瞥だけして要の側に戻し、依頼状と受付票は自分の側に引き寄せて目を通し始めた。
　恵美のために隣の椅子を引きながら、「すみません、書きかけで」と受付票に改めて手を伸ばす。
「あ、いいんですよ。これだけ書いていただければ。あとはこちらで埋めておきますので。今日のご用件は何でした？」
「はい。母にこれが届いたということで」
　要は先週母宛に届いた、年金の加入記録と、年金が受け取れない

かもしれないように書かれたはがきの通知を、母の年金手帳と共に出した。
「はい、分かりました。まず記録を確認しますので、お待ちくださいね」
若干くだけた感じで、女性職員は言った。相手が子供同士ということで、調子を合わせているようだ。
手元の端末に素早く打ち込んでいき、情報を確認していった。その流れの中で、両親の婚姻日、母の旧姓も確認された。通知を受けたことで、母が年金をもらえないかもしれない、と不安がっていることも伝えた。
次々とデータをプリントアウトし、整理すると、要に提示した。
「お待たせしました。結論から言うと、大丈夫です、年金を受ける権利はありますよ」
「そうですか」
通知の文面や社会保険庁ＨＰの内容をから予期していたことだったが、やはりほっとした。
「年金を受けるためには、基本的には25年‐実際には月単位だから、300月の納付や免除の期間が必要なんです。お母さんの納付や免除の期間は、このはがきにあるように269カ月なんですけど、ここに書いてある合算対象期間というのもあって、」
と、はがきの該当箇所を指し示しながら、
「昭和61年4月より前は、会社員の方や公務員の方なんかの配偶者‐この場合はお母さんのことね‐は、国民年金に入るのは義務じゃなくて、任意だったの。お母さんはこの期間、国民年金には入っていなかったわけだから、任意で払っていた人に比べて金額は少なくなってしまうけど、年金そのものを受け取れるかどうかの権利に必要な300月には、この任意で入ってなかった期間も算入されるの。つまり、そうやって計算すると、年金を受け取る権利は満たしているから、お母さんには安心してもらっていいわ」
女性職員は要の表情を見ながら、理解を確かめつつ説明を進めた。

幸い、要が見当をつけていたとおりの回答だったこともあり、理解するのに苦労はしなかった。最後に、年金を請求するための書類の一覧表も、説明しながら必要な項目に印を付けていってもらい、受け取った。その中にある戸籍や住民票は、まだこれから迎える誕生日が来てから交付されたものが必要なので、注意しなければいけないと意識した。

「そうですか。じゃあ、年金をもらえる金額は、どのくらいになるんでしょう？」

要が聞くと、女性職員は委任状にもう一度目を通した。

「ごめんなさい、この委任状だと、年金の受け取る権利だけの確認に限定されてるように読めるから、この場で金額の試算までは出すことができないわ。本当はこんな堅いことを言って申し訳ないんだけど、お母さんも、お子さんにあまりお金のことを知ってほしくはないかもしれないし。ただ、お母さんからまたこちらにお電話をいただければ、普通は三週間くらいで見込み額の回答を郵送できるから、それを教えてあげてくれるかしら。あ、その際には電話口に基礎年金番号を用意してもらってね」

「ふーん、うちの母さんは、そんなことは気にしないと思うけど。でも、ま、そのくらいは自分でさせますよ。ありがとうございました」

「はい、ありがとうございました。本当にしっかりしたお子さんで、お母さんがうらやましいわ。妹さんも、かっこいいおにいちゃんで、自慢なんじゃない？」

早々に席を立って離れかけた恵美が、キョトンと振り返った。それから見る間に顔を真っ赤にして、口をパクパクさせたかと思うと、顔を伏せて、要を置き去りにして早歩きで行ってしまった。

「あら、どうしたのかしら？」

「はあ、恥ずかしがり屋なので」

少なくとも、時節そういう面を見せる。だが、この場合、誉めそやされたのは要の方で、照れるべきは自分ではないのだろうか、と

思う。

もう一度女性職員に挨拶をすると、少し離れた場所で待つ恵美の元に急いだ。

「ありがとう、待たせたね」

「ううん。おにいちゃん、次はどこに行く？」

わざとだろう、［おにいちゃん］を強調する恵美の口調は、反論を許さないものだった。要は今聞いた知識を整理するためにも、もう帰ろうと思っていたのだが…。どこかの喫茶店にでも入って甘い物を与えたら、いくらかは納得してくれるだろうか。

足取り軽やかな恵美を連れだって外に出る前に、要は出入り口付近にあった年金のパンフレットを、いくつか手に取った。

今回、母のために［老齢］年金を調べて行くうちに、［障害］や［遺族］という種類の年金もあるらしいことを知り、興味を引かれていたのだ。

第3節

3

要と恵美が社会保険事務所へ行った翌日の日曜日、父は毎週のごとく、正午も目前になって、やっと起きてきた。
母は恵美の作ってくれた朝食を平らげてから、さっさと一人でデパートへと出掛けてしまっていた。恵美はいつになく台所を片付け半分にして、言葉すくなに自室に引っ込んでおり、要はリビングでテレビをつけながら、新聞を流し読みしていた。
「おはよ～う」
父はコーヒーをいれるための湯を沸かしながら、眠そうに歯を磨いた。
「んー。おはよ」
「おまえも飲むか？」
「飲む」
父はマグカップを二つ用意すると、ドリッパーで丁寧にコーヒーを入れた。たちまち、頭をシャキリとさせる芳香が、要の鼻に届く。
「昨日、母さんの代わりに社会保険事務所に行って来てくれたんだってな。偉いもんだ」
「何かの皮肉？」と、熱いマグカップを受け取る。
「ひねた取り方をするな。感心しとるんだ。実際、お前は恵美ちゃんの面倒もよくみるし、しっかりして来た。さすがお兄ちゃんだな」
「父さんまで、その呼び方はしないでよ」
要は家庭内の不穏な風潮にクギを刺した。それから、昨日社会保険事務所でもらって来たパンフレットに目を通して以来を、検討を重ねて気になっていた質問を持ち出した。
「ところでさ、恵美のお母さんが亡くなった時、年金の手続きをし

たのって、父さん？」
「ん、どうだったかな…」父は少し考えてから、「いや、大方のことは彼女の会社がやってくれたな。だが、個人でやる手続きは遺族の方で確認してくれと言われたから、母さんが2、3度社会保険事務所に足を運んで、ぶつくさ言っとったな。書類が多いだの、難しいだの」
「ああ、母さんが…」
要は母の大雑把な性格を思い、過去のことながら手続きの不備を心配し、だが、それゆえにこそ希望の種火を大きくした。
「恵美ってさ、なんで遺族年金をもらってないの？」
と、核心に切り込む。
「遺族年金だって？」
父はこれが真剣な話なのだと覚り、心持ち背筋を伸ばし、記憶を慎重に探って言葉を選んだ。
「そういえば、そんなのもあると母さんも言っていた気がする。遺族年金がもらえるかもといって、なんだか恵美ちゃんの父親がどうしているのかまで聞かれたとか。だが、その後いろいろ整理していて、結局借金の方が多いから、相続権を放棄して遺族年金の話もそれっきりだったと思う。‐参考になるか？」
恵美の父親は、彼女がまだ小学校に上がる前から借金と離婚届だけを残して失踪していて、いまだに行方知れずのままだった。生きているかどうかも分からないが、ギャンブル狂が破滅の元だったらしい。
「そうか。じゃあ、相続権を放棄したから遺族年金はもらえない、とはっきり聞いてる訳じゃないんだね」
要の考え込んだ一言に、父は意表をつかれて一瞬言葉を失った。
「そう言われてみれば…そうだな」
要は鼓動が早くなるのを自覚しながら腰を上げた。
「ちょっと恵美と話してくる。また、社会保険事務所に行くことになるかも」

「おい、あまり期待をもたせて、後でがっかりさせるなよ」
要は父の言葉を背に受け止めてうなずくと、恵美の部屋に足を向けた。
「恵美」
扉の外から静かに声をかける。いつもならいきなり扉が開くか、少なくとも即座に返事が返ってくるところなのに、それがない。
「はい…」
弱々しい返事がようやくあった。
「入るよ」
要が扉を開けて見ると、恵美はベッドで布団をかぶっていた。父でもあるまいに、昼間から恵美がこんなふうに布団に入って人を迎えるなど、およそ彼女らしくなかった。
不審に思いながらも、要は早速用件を話した。
「突然だけど、明日にでもまた、社会保険事務所に行かないか?」
毎週月曜日なら、社会保険事務所は役所ながら、夜の7時までやっているのを知っての誘いだった。
だが、恵美の反応はくぐもったうめき声のようで聞き取れさえしなかった。
「おい、どうした」
要は本格的に心配になり、ベッドの脇まで近寄った。
「う…ん。ごめんね、大丈夫」
なんとか顔をこちらに向けて、弱々しく微笑む恵美のその言葉を、素直に受け入れられるはずもなかった。
「大丈夫な訳があるか。どこか痛いのか。熱は? 計ってないなら体温計をもってくる」
「熱は…ないと思う。お腹が痛いの。それだけだから。しばらくこうしてれば治まるよ」
「だが…」
更に言い募ろうとして、ふと言葉に詰まった。これは、単に月に一度の現象か?

要の複雑な表情の意味を敏感に察した恵美は、肌理の細かい頬をほのかに高潮させた。
「馬鹿！　違うわよ。なに考えてるの、かな君のエッチ。時々、よくあることとよ。胃が痛むだけ」
要は、からかおうとする恵美のペースに乗せられそうになり戸惑ったが、すぐにそれどころではないのに気付いた。
「それじゃあ、なおさら深刻じゃないか。今まで一度も言わなかったろう。すぐ病院に行くぞ。動けるか？」
「もう、寝てれば治るって」
要はもう、恵美の抵抗に聞く耳を持たなかった。
「辛いだろうが、外に出る準備をしておいてくれ。すぐに行くぞ」
そのまま階下に降りると、トーストを食べかけの父に有無を言わせぬ大声で呼びかけた。
「父さん、すぐに着替えて！　車を出して。恵美を病院に連れて行くんだ」
「なに！　恵美ちゃんがどうしたって？」
父も血相を変えて怒鳴り返した。ブルーベリージャムをたっぷり塗ったトーストを未練なく皿に戻す。
事情を聞くと、要にせかされるまでもなく、ばっちりと目を覚まして病院に行く準備を手早く整えた。彼が恵美を気遣う気持ちも、決して要に劣るものではない。

慌てて駆け込んだ病院での診断は、胃炎ということだった。とはいえ、かなり程度の重いものであり、普通なら寝て直そうと考えるような痛みではないはずだ、とも言われた。しょげ返っている恵美を前に言葉にこそしなかったが、横目で見る要の視線は雄弁だった。
今夜の食事は薄いおかゆ程度にしておくことと、明日からも一週間は軽めの食事を摂って様子を見ることとを医師からくれぐれも言われ、お終いに内服薬をたっぷりと出され、半日かがりの騒動を締めくくった。

家では携帯のメールで簡単な報告を受けていた母が、いくつもの買い物袋を散乱させたまま出迎えた。感情と言葉を惜しみなく動員した、いかにも母らしい心配の表明だったが、今の恵美にはくどいだろうと要が気を回し、巧みにガードしてさっさと部屋に上げてしまった。

「おかゆは後で持ってくから、ちゃんと寝てるんだぞ」

「分かった。ごめんね…」

要たち家族に面倒や心配をかけまいと、ぎりぎりまで我慢していたことが裏目に出てしまったことをよほど気にしているのだろう、恵美のしょぼくれていた。

「気にするな」

可能な限り強調したいところだったが、強く言えば逆効果なのは分かりきっていたので、要は意識してさらりと言った。

恵美の姿が自室に引っ込むと、母は早速質問攻めを再開した。

「胃炎っていうけど、ひどかったの？　おかゆ、食べられる？」

「何かごく軽いものでもお腹に入れた方がいいらしい。そういえば、俺も腹が減ったな。朝も昼も食い損ねた」

父に言われ、母は早速、少し早めだが夕飯の準備を始めた。必然、恵美のおかゆが優先される。要は、正直言って食欲を全く感じていなかった。

「それで原因は何なの？」

その問いは答えが予想され、悲しげだった。

「ストレス…だろうね」

父が端的に答えた。母は黙ってしまい、仕方なしに父が後を続けた。

「やはり、進学をまだ気にしているのか。養育しているこちらの世間体もあるからと、無理に納得させたようなものだからな。人の世話にはなりたくない、というプライドの高さは、さすがにお前の血筋だな」軽口を母ににらまれ、慌てて父は付け加えた。「もちろんいい意味でだが」

母はため息をついて、「昨日、要と出掛けた時には、あんなに嬉しそうだったのにね。帰って来てからも、それは自慢げに、楽しかったことや社会保険事務所での堂々とした要の態度を報告してくれたわ。ちょっとこちらが恥ずかしくなるくらい初々しくてね」
「僕も気づかなかったのがいけなかった。ずっと、ひどい痛みを我慢してたはずなのに」
要はやるせない後悔を吐露した。
「今に始まったことじゃないだろう。他人の家でやっかいになっているという意識が抜けないんだろうな、俺達にしてみれば寂しいことだが」父はここで言葉を切り、母と要を見つめ直した。「やはり、俺達が家族になってやることはできないだろうか」
母はうなずいたが、要には、それができなかった。
「今でももちろん、恵美ちゃんは欠かせない家族の一員だけど、戸籍上も、ということね。いいと思うわ。そろそろ、真剣に話し合う潮時ね」
恵美の母親が亡くなった後、要の両親が後見人となって面倒をみるという話は、すんなりと円満に決まった。その際、養子縁組も考慮されたが、恵美の意志も尊重する意味で、そんなに急がなくてもよいだろう、と棚上げにされていた問題だ。
恵美には、父も母もこれまでそれとなく、養子に迎えたい意向は伝えていた。だが、その度ごとに恵美は曖昧な態度を見せるばかりだったので、ずばりと話を切り出せずにいたのだ。
実のところ、要にもその覚悟ができているのか怪しかった。恵美に対しては兄と名乗っても恥ずかしくない態度で接していると自負しているが、不思議と本当の［妹］にしたいかと問われると、答えをためらってしまう。
この気持ちが何なのか、要には計り兼ねていた。生まれた時から不変の家族の輪に、その一員も同然とは言え、他者を混ぜることに抵抗があるのだろうか。そんな自分の狭量を疑うのは、いやな気分だった。

「それで、要はどうなんだ？」と父が聞いた。
　予測された避け難い質問だが、答えが固まる前に直面させられてしまった。要は平静を装いながら、出るにまかせる気分で口を開いた。
「-そうだね、養子になることで恵美の気持ちの負担が軽くなるのなら、反対する理由はないよ。でも、どうだろう。恵美が、うんと言うとは思えないな」
　要の実は消極的なだけの意見に、父は考え込んでしまった。
「ふむ。恵美ちゃんが一番なついてるお前が言うんなら、確かに難しい話なんだろうな」
「じゃあ、恵美ちゃんがうんって言えば、あんたはいいのね」
　母のそれは疑問でなく、確認であり、決めつけですらあった。
　要が言葉に詰まっていると、小さい足音が聞こえ、それから扉が開いた。
　皆が服を着ている中の、はんてんを羽織った恵美のパジャマ姿は、頼りなげでか細い印象を強調した。
「お薬が効いてきたら、すっかりよくなったみたいです。お料理、手伝います」
　確かに表情には生気が戻り、要を心底ほっとさせた。
「だめだめ、病人にそんなことはさせられないわ。第一、もうすぐおかゆができるんだから。元気になったのなら、部屋に持っていかずに、ここで食べていったら？」
　母は立ち上がると、付け合せの梅干や佃煮を用意し始めた。
　母のペースに逆らう労力の浪費を、要と同様、恵美も知り尽くしている。おとなしく席に座り、それ以上何か手伝おうとは言い出さなかった。
　母の立ち回る音とテレビのニュースの声だけが流れ、妙な沈黙が漂った。
　恵美が思い出したように、「かな君、明日、社会保険事務所に行くって言ってた？」

「ああ。夜の7時までやってるから、学校帰りにでもどうかな、と思って。まだ分からないけど、もしかしたら恵美に遺族年金が出るんじゃないかって聞きに行きたいんだ」
　10ページくらいのパンフレットを読んだ程度の知識なので、父に言われるまでもなく、早まって過大な期待は与えたくないし、要自身、確信とは程遠い段階だった。が、否定する材料も今のところなかったので、やれることはやっておきたかった。
「遺族年金？」恵美は小首をかしげ、「分からないけど、かな君が調べてくれたんなら、わたしも聞きたいな。ダメモトってやつね。明日ね。分かった」
「いや、その体調じゃ、やめておいたほうがいい。様子を見て、よかったら来週にしないか？」
「大丈夫だって。みんな、大げさなんだから」
　母が程なくして、恵美の配膳を整えた。おかゆの入った一人用土鍋を中心に、梅干や各種佃煮をそろえた小皿の類。飲み物には牛乳だ。
「はい、できたわよ。熱いから、気をつけてね」
「わあ。ありがとうございます」
　恵美が土鍋のふたを取ると、煮えた米の香りが広がった。「いただきます」と、はふはふ言いながら食べ始めると、母も片付けもそこそこに食卓に座り、その様子を見つめた。
　要と父は思い思い、見るともなしにテレビを眺めたりしていた。
「ねえ、うちの娘にならない？」
　突然の言葉に要は目を見張り、信じられない思いで母を見た。父はテレビを見たまま、耳をそばだてているのだろう。恵美の手は止まり、よく見ると箸の先で、昆布が震えていた。
　悪気はないがうかつな母は、恵美の返答を期待して待っていた。ただでさえ微妙な問題を、ストレスを抱えて病院から帰ってきたばかりの相手に、不意打ちのようにぶつけるとは、どういう神経をしているのか。

「母さん」
険のある声で、要が掣肘した。
「なによ」
「母さん」と、今度は父だ。
「なによ」
心持ち母の声は小さくなり、劣勢を認めた。
恵美は箸を置き、視線を落としてしばらく口をつぐんだ。要は別の話題を提供しようと、考えが空回りしていた。
恵美が顔を上げ、きっぱりとした口調で言った。
「ありがとうございます。でも、ごめんなさい。わたしを養子にはしないでください。このままで、どうかいさせてください」
言葉の最後は、震えていた。
「ああ、私こそごめんなさい。いきなりこんなことを…。今の話はうそではないけれど、とりあえず忘れてくれると助かるわ。馬鹿ね、私」
母の謝罪に恵美は目を伏せて、首を振った。
「う…」
眉をしかめて、体をくの字に折り曲げる。
「恵美！」「恵美ちゃん！」「大変！」
皆がおろおろして声をかけたが、恵美はただ口を引き結んで、苦痛の波が引くまでじっと耐えるだけだった。

第4節

4

　次の日の夕方、結局要は恵美と一緒に再び社会保険事務所に訪れた。母の思い込み同様、一度言い出した恵美の強情に逆らうのにも相当な抵抗力を要するので、ストレスを与えないため、要が折れることにしたのだ。
　前回と同じく、受付番号が記載された紙片を受け取ると、待ち合いの椅子に腰を降ろした。午後6時を過ぎたところだが、一昨日の土曜の日中よりは込み合っていて、しばらくは待たされそうだった。中高の制服二人連れの組み合わせは珍しく、さりげない視線が集まって落ち着かなかない。
「今日聞きたいことのパンフレット、少しは目を通してくれた？」
　要は昨日の夜、自分は目を通し終えた遺族年金のパンフレットをあらかじめ恵美に渡していた。前回の単なる付き添いと違い、今回の主役は恵美なのだから、彼女が話に参加しないのは具合が悪い。
「え？　へへ…」
　恵美のごまかした笑いに、予期していた要は軽い嘆息一つで答えた。
「分かった。じゃあ、今からちょっと説明するから。いい？」
「うん」
　恵美は素直に聞く姿勢を整えた。
「まず、遺族年金は、厚生年金と基礎年金の二種類に分けて考えられる。遺族基礎年金についは後回しするとして、遺族厚生年金が発生するための死亡者側の条件だが、ちょっとパンフレットの‐」と言って、恵美のひざの上のパンフレットをめくる。「ここだ。ここ

に書いてあるように、四つある。が、恵美のお母さんに関係があるのは、これだな。厚生年金をかけている最中に死亡した場合、というやつだ」
要の説明に、恵美はおとなしく、時折うなずきながら聞き入っていた。
「恵美のお母さんは、正社員として厚生年金に入っていた。亡くなられるまで退職はしていなかったらしいから、ここに当てはまる。ただし、亡くなるまでの期間で保険料を3分の2以上払っているか、直前の1年間でちゃんと払っているか、どちらか必要ってあるけど、まあ大丈夫だろう」
恵美の母は、化粧品会社でやり手だった、と聞いている。不幸にして癌を患ってしまい、長期の休暇扱いで入院して治療に専念するも、早い進行を食い止められずに逝ってしまったのだが。
あれから4年になるが、やはり恵美の前で母の死を話題として持ち出すのは居心地が悪い。だが、この際は仕方がないので、要はなるべく、淡々と話を進めていった。
「次に、遺族年金をもらう側の条件だ」と、隣のページを指で示す。
「これを見ると、優先順位で一番にくるのは、子供である恵美だけということになる」
18歳に達する年度末までの子供と同順位者に、55歳以上の夫というのもあったが、恵美の父はすでに離婚して行方知れずだし、第一いたとしても55歳未満なのだから関係がない。
「ここまで、いいかな?」要が区切りを入れた。
「うん、分かった」
恵美は黙って今の2ページを読み返すと、続けて次のページもめくって読み進めていった。要は昔から、2学年上の立場から、恵美の勉強を見てやることも少なくなかった。そして、彼女はいつも申し分のない生徒どころか、飲み込みの速さで教える側を置き去りにしてしまうことさえあるのだった。
それ以上、説明や注釈を入れる必要を感じなかったので、要は恵

美の様子をただ見守り、順番で呼ばれるのを待っていた。
　恵美はそのまま、集中して１０分程もパンフレットを読んでいた。あるページは飛ばすようにして、またあるページは考え込むように時間をかけて。一読してから、恵美は特に時間をかけて読み込んでいた、終盤のページを開きなおした。
「これなんだけど…」
　恵美が指し示したその項目は、遺族年金がもらえなくなる場合を解説していた。死亡したときとか、結婚したときとかが目に入った時点で、当面気にすることはないと思い、要はあまり真剣に字を追っていなかったことに気がついた。
　が、恵美の細い指先が示した先には［養子となったとき］とあり、要をぎくりとさせた。
「直系血族および直系姻族以外の方の養子となったとき‐ってあるけど、直系血族や直系姻族って、何？」
　問われて、要は即答できなかった。いつか学校で習った気がするし、常識の方面からも知っていてしかるべきかも知れないのだが、あいにくと明快な解答が浮かんでこなかった。
「ごめん、わからない」
　正直に要は言った。ここの項目は、後で必ず、職員に質問しなければならない。
「そっかー」恵美は視線を宙にめぐらすと、ひたと、要を見据えた。そっと微笑み、「ねえ、かな君。わたしを妹にしたい？」
　不意打ちだった。すっかり年金の事務的な思考に視野を絞っていた要だったが、恵美はそれらの内容も理解しつつ、更に自分の実際的な問題として、思慮を広げているらしい。その質問の意図をつかむことはできないが、罠が潜んだ謎かけ、という気配を察することはできた。
「その問題は、せめて来週、もう一度医者に診てもらってからにしないか？」
　要は、我ながら無意味な逃げ口上を選んでいた。

「どうせ気にかかっているんだから、黙って悩んでいる方が体に悪いと思うの。それに、ほら、避けては通れないみたいよ」
恵美はなぜか勝ち誇ったように、養子縁組が奇妙に年金とからんでくるらしい、さっきの項目を見せびらかした。
うまく自分の意見が整理できていない要は、逆に恵美がどうして養子縁組に反対するのかを問いたかったが、その問い返しは卑怯と失礼のそしりを免れないので、ぐっと我慢した。
「今のままがいい…かな」
要は正直さに主眼を置いて、心中をできるだけ簡潔に表現した。すると、昨日、恵美が言っていたこととそっくり同じなのに驚かされた。
恵美は計るように要の顔をしげしげと観察してから、「私のまねだ」と、満足げに破顔した。
「ヨンヒャクナナバンノ番号札ヲオ持チノオ客様、サン番ノ、窓口マデ、オ越シクダサイ」
呼ばれたのは、要が持っていた番号札の数字だった。
「行くよ」
「うん」
恵美は目に見えて機嫌が良くなっていた。
３番のブースは、前回と同じだった。担当者も同じであれば良いと思う。
「お待たせしました」と挨拶をくれたのは、果たして前回と同じ担当者であった。
「お願いします」
要と恵美の挨拶は声が重なり、その場に笑みを誘った。
「あら、一昨日のしっかりした息子さんとお嬢さんね。何か分からないところがあったかしら？」
女性職員の加藤も印象深い二人を認めた。やはり、知り合いの親切なおばさんだな、と要は第一印象を思い出した。放射してくるような親身な態度が嫌ではない。

「いえ、今日は母とは別の件で」
　要は用件を書いた受付票を差し出した。今日の相談者は要ではなく恵美の名前になっていて、しかも代理人ではなく本人であった。
「香坂恵美さん？」
「はい」
　加藤に名を呼ばれ、恵美が積極的に返事をした。その様子を好ましげに、加藤はにっこりとした。
　受付票には、恵美の母が４年前に亡くなったことと、そのことにより遺族年金の請求はできるか否か、という内容を、要が簡潔に書いていた。
「お母様が…」と、感に堪えて加藤がつぶやいた。
「分かりました。遺族年金ですね」加藤は顔を上げ、事務的な口調に切り替えた。「ではまず、お母様の年金の記録から確認したいのですけど、お母様との続柄が確認できるものはお持ちですか？」
　その点は、要が事前に備えていた。恵美の母の年金手帳がないので、と出掛ける前に電話で問い合わせていたのだ。
「戸籍謄本で良かったですか？」
　要が恵美の戸籍謄本を出すのに合わせて、恵美も思い出して自分の学生証を出した。
「ありがとうございます」加藤は要の顔を関心したふうに見て、「準備がいいのね」と、個人的な感想も付け加えた。
　それから加藤は戸籍謄本に目を通し、コンピューターに素早い打ち込みを始めた。いろいろな画面を見比べて、数枚は印字もする。
「お母様は、会社にお勤め期間中にお亡くなりになられていますね。申し訳ないけど、お亡くなりになられた原因は？」
「癌です」
　恵美が無感動な声音で答えた。加藤がうなずく。
「お父様はご離婚なされていますね。今、香坂さんとご一緒にお住まいではないですか？」
「違います。居所も知りません」

「そうですか。ご兄弟はみえますか？」加藤は要の方を尋ねるように見た。
「いえ、僕はいとこです」
「私は一人です。兄弟はいません」
「あ、そうだったんですか。この間は間違えちゃってごめんなさい」
要も恵美も、気にしてない印に首を振った。
加藤はそれからコンピューターの画面や印字した紙を見直し、整理のためにしばし無言となった。
そして、告げた。「では、遺族年金の請求をしていただけます。お聞きしたいのですが、４年前に手続きをしなかった理由は何かおありですか？」
ここまでは要があらかじめ調べた通りの結論にたどり着いたが、ここから特有の事情を相談せねばならなかった。要は話を引き継いで良いか恵美を見ると、彼女も口元を結んで彼を見て、促していた。
「実は、恵美のお母さんは負債を抱えてまして、恵美は遺産を相続放棄したんです。それで、遺族年金も含めて、お母さんに遺された一切のお金をもらう権利がないと考えたのですが」
「なるほど」加藤は得心がいったようだ。「そう考えてしまう人は多いようですね。でも、大丈夫よ。遺族年金は亡くなられた方から遺された財産ではなくて、該当する遺族の方固有の権利なんです。だから、相続放棄をしても、遺族年金の請求権まで放棄したことにはなりません」
この言葉に安心して、二人とも笑みをこぼした。だが、恵美はすぐに、はっと気を引き締めた。待合で読んでいたパンフレットを取り出す。
「先ほど、私は兄弟がいないと言いましたが、もし、これから兄弟ができたとしたら、どうなるんでしょうか」
恵美の真剣な質問を、加藤は即座に飲み込めなかった。恵美もその性急な聞き方に気が付いて、補足することにした。
パンフレットの、遺族年金がもらえなく条件を解説したページを

指し示して、「具体的には、私がおじとおばの養女にしてもらった場合、ここにある条件に当てはまるのか、気になってるんです」
「ああ、そういうことですね。ここまで読み込んでくれていると、話がしやすくて助かるわ」加藤はゆっくりした慎重な説明口調になり、「この項目でいっているのは、恵美さんの場合、つまりおじいさんやおばあさん、あるいはひいおじいさんやひいおばあさんなどと養子縁組する場合は除いて、養子縁組したら、遺族年金の権利はなくなります、ということなんです。だから、おじさんやおばさんと養子縁組をしたら、遺族年金は受け取ることができなくなります。あと、恵美さんが結婚されたり、１８歳を迎える年度末がきても同様です、というのがここと ここに書いてあることです」
「では、おじさんやおばさんと養子縁組はしない方がいいんですね？」
「遺族年金がもらえるかもらえないかだけで言ったら、そう言えますね。ただ、養子縁組するということは、他にも社会的な影響が少なくないと思うので、いろいろと考え合わせてみてください」
「はい、ありがとうございます」
すでに勝ち誇った顔の恵美が、どのように考え合わせて結論を用意しているのか、聞いてみるまでもなかった。
「それで、遺族年金を恵美はどのくらいもらえるんですか？」
恵美は浮かれており、望まない養子縁組をしない口実だけを持ち帰っては仕様がないので、要が現実的な質問を進めた。
「少しお待ちください」
加藤は計算のため、コンピュータを操った。印刷された紙が新たに1枚増えた。
「お待たせしました。年額ですけど、このようになります」
加藤は印字したばかりの紙を、恵美に差し出して見せた。
「遺族厚生年金をお子様が受ける場合、遺族基礎年も加算されますので、合計で１２０万円くらいになります。それが４年前までさかのぼって支払われますので、初回の支払いは概ね５００万円前後に

なります。亡くなられた年月を具体的に教えていただければ、もっとちゃんとした金額を計算できますが」
「あ、いいです」
言下に恵美は断った。細かいことが気にならなくなっているのだろう。
「それでは、ご提出いただく書類の書き方と、そろえていただきたい添付書類ですが－」
加藤は書類の書き方の注意点を、記載例も合わせて見せながら説明していき、それから記載例の表紙が添付書類の一覧になっていたので、こちらも一言ぐらいずつ加えながら、必要なものに印を付けていった。
「－以上になりますが、何かお聞きになりたいことはございますか？」
「いえ、ありません」
またしても恵美が言った。加藤は少し困ったように、要の方を見た。要は苦笑しながらもうなずいた。
「また何かあれば、電話ででもお尋ねします。ありがとうございました」
「ありがとうございました」と、恵美も。
「こちらこそ、ありがとうございました」
加藤は素直な挨拶に目尻を下げながら、自分も挨拶を返すと頭を下げ、席を立って去る二人を見送った。

それから3カ月ほどが経過し、恵美は自分の通帳残高が５００万円を超えているのをその目で見た。
「すごい！　本当に入ってる」
ＡＴＭの設置されたコンビニを出たところで、恵美は小さな明細表を両手で掲げ持って叫んだ。
「そりゃ入ってるよ。振込通知書も来てたんだもの」
水を差している、要も内心はその額の大きさに完璧な平静を保っ

ているとは言えなかった。
「わたし、高校に行く！　学費はもちろん自分で出すわ。おじさんたちが反対しても、これは絶対譲らない。お兄ちゃんと一緒の高校にしようかな」
　恵美が対決を誓い、恐らくその通りになるであろう父と母の反対とはもちろん、高校進学の決意自体のことではない。学費を出す財布を、まだ庇護されるべき恵美に頼ってもらえないことのほうであった。
　だが、さしもの謹厳な父も、自分の意見を貫くことにかけては人後に落ちない母も、恵美のこの勢いには抗すべくもないだろう。
「恵美なら、もっと上の高校を目指せるんじゃないか」
　要の通う高校も、周辺地域では進学高で通っていたが、恵美が本気で受験勉強に身を入れれば、よりトップクラスの高校を志望するのに不足はないはずだった。
「他の学校じゃ、お兄ちゃんと一緒に電車通学する楽しみがないじゃない」
　恵美は要の言葉を詰まらせるのに、人の悪い楽しみを見出しているようだった。心なしか、幼いころの面影が戻ったようだった。自由闊達、あるいは直情径行、またはいたずらっ子な恵美だ。
「でも、父さんと母さんは残念がってたよ。恵美を娘にしたい、というのは本心だったからね」
　要の言葉に、恵美はしばらく考え込んだ。そっと呟く。
「養女じゃなくても、娘にだったらなってあげられるかもしれないわ。かな君の協力があったらね」
　かな君？　めまぐるしく変わる恵美の立ち位置に、要は幻惑される思いだった。
　恵美はもう一度、数字の桁数が劇的に増えた銀行の取引明細をじっと眺めた。それから衝動的に、
「ありがとう。大好き」
　恵美は、要の胸元に力まかせにしがみついた。

街中の歩道で、通りすがりの人たちのさりげない注目が集まる。抱擁と呼ぶには、不器用で硬質だった。要は、小さな肩に優しく手を置いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9136f/

年金と妹

2010年10月8日15時15分発行